

Adventurous TOKYO CRUISE

文・写真 宮坂朋彦(みややん)

1. 東京をクルーズする

東京という都市をめぐるのは、大自然の中を散策するのと同じくらい冒険的だ。

一口に東京といっても、23区の内と外では全く空気が違うし、23区のなかでも街によって特徴が全く異なる。



↑以前、浅草で遊んでいたらミーアキャットを散歩させている人がいた。ペットのクセがすごい。

例えば、上野公園を拠点に東へ進めば、食器や道具の間屋街である合羽橋を通り、さらに少し足を伸ばせば浅草、ホッピー通りで一杯やって、頑張ればその先、スカイツリーまで堪能できる。

あるいは上野から南に下れば、アメヤ横丁の叩き売りを横目に、湯島天神にお参りをして、楽器のまち御茶ノ水や、電気街とオタクのまちで有名な秋葉原へ。さらにそこからひとつ隣へ行って、古本とカレーのまち神田・神保町、そして東京ドームと小石川後樂園へと、街の個性が目まぐるしく移り変わるのを楽しめる。

一つ隣の駅へ行くだけ、一つ違う道を通るだけで、異国に迷い込んだかのようなエキゾチックな空気が味わえるのだ。

区外は区外で、東京のイメージを覆す景色を見せてくれる。

のんびりとした空気の流れる畑と、苺やとうもろこし、野菜の直売所。のどかな河原は、区部とは時間の流れが違うかのようだ。北海道で生まれたのち、物心ついてからはほとんど東京の郊外で育ってきた私にとっては見慣れた光景だが、地方から出てきた友人には「これ東京？」と驚かれる。

東京は千姿万態だ。
そんな東京の街を歩く。



↑我が家から徒歩3分。
東京も郊外はこんな感じだ。

別に歩きでなくてもいい。自転車でも車でもバイクでも電車でも、この街をクルーズ(巡航)してみる。都市という名の海に漕ぎ出してみると、キャンプとはまた違う冒険心をくすぐられる。

私はキャンプも好きだが東京の都会も好きだ。キャンプに行けない今こそ、自然文化誌研究会で、あえて東京の話をしてみたい。

2. 東京無人

1月、コロナウィルスが大きな騒ぎになる少し前。かの有名な恵比寿ガーデンプレイスにある、東京都写真美術館を訪れた。見たのは、写真家中野正貴さんの写真展『東京』。

(詳細は <https://topmuseum.jp/contents/exhibition/index-3612.html>。一部の写真は閲覧可)

偶然、中野さん本人が在廊し解説してくれる回に当たった。福岡生まれの中野さんは50年以上東京に住み、東京の写真を撮り続けてきた。今回の写真展は、その総集編とも言えるもの。中でも印象深いのは、約20年前の写真集「TOKYO NOBODY～東京無人～」からの作品たちである。東京のど真ん中の風景でありながら、正月やお盆などの早朝を狙うことで、一切人のいない写真を撮る試み。今思えば、コロナでの外出自粛を暗示していたかのようだ。



↑中野正貴さん(64歳)。
展示中の写真撮影は自由だった。

「風景の写真だけど、写っていない人間が主役」

深夜を除いて、東京都心の街並みが完全に無人になることはほとんどない。

中野さんは、あくまで日の出ている時間帯に完全な無人の写真を撮ることにこだわった。そこにいるはずなのに、写っていない。いるはずの人々がない写真たちは、見る人の「何が起きたのだろう」「どこへ行ったのだろう」という想像を掻き立てる。



↑「思わずサイン本を買う」
の図

想像は、東京クルーズに不可欠だ。街を歩くとき、よく勝手な想像をしながら風景を見る。さびれた料理屋や、誰が来るのかわからない場所にある喫茶店、古いブティック。そこにはどんな人が住んでいて、どんなストーリーがあるのだろう。

そして、これからどうなるのだろう。街は更新が早い。

中野さんの写真の中にも、20年前と今とでは様変わりしている場所がいくつもあった。銀座の写真(上記 URL から閲覧できる)は、1996年のもの(私が生まれた年だ!)。先日行ったばかりの銀座の街は、私が北海道でおぎゃあと泣いているころ、こんな顔をしていたのか…!知り合いの昔の写真を見たような、両親の若いころの写真を見たような。

そうか、今日私が見た風景も、もう二度と見ることはないかもしれないのだ。一期一会が、そこら中に散らばっている。あっちもこっちも気になってくる。次に来た時、この場所は果たしてどうなっているのだろうか?

美術館を出て上を見上げると、入る前に見たはずの恵比寿の街並みが、映画や小説のワンシーン、ゲームや漫画の一コマのようにどこか違って見えた。

3. 都市という自然

「自然は私たちの思い通りにならない」はよく聞く話だ。

その一方で、裏を返せば「人工物」なら思い通りになるというように、そんな傲慢さがあるように思えてならない。

東京という街を歩いていると、不思議と森の中を歩いているように感じることもある。

人が作り出したはずのビルの隙間から吹く風や木漏れ日に、人が意図したもの以上の何かがあるような。高層ビルから見た街の明かりが、富士山の上から見た樹海の景色に重なって見える不思議。

東京という街は、もはや作り出した人の手を離れ、一つの自然として息をしているように思えるのだ。



↑霧のかかる渋谷のビル。

この街は私たちにはどうすることもできない。

否応なしに変わり、動き、進んでいく都市のエネルギーは、大自然を前にしたとき感じる雄大さとどこか似ている。

境目なんてあいまいで、人間だって動物だ。

人間も自然の一部と思えば、東京という都市も、人という自然の生き物が作り出した第二の自然のようなもの。大自然のなかで、私たちに思い通りになるものなんてこれっぽっちもない。それを思い起こさせてくれるのは、何も豊かな森や川や海の方ばかりではない。



↑六本木の森ビルから。

写真が趣味なわけではないので撮影技術はお察し。それでも、最近のスマホはすごい。

そう思って街を歩くと、どこか謙虚な気持ちになってくる。私はこの街について、知っているようで知らないのだ。

すると見慣れた風景が、未開拓の神秘へと姿を変える。ただの散歩が、冒険的な巡航になる。

そうだ、何でもない風景だけだ。

一枚写真撮っておこうかな。

20年後を楽しみに。



↑ただの近所の道。

団地の字のフォントって、なんかいいよね。